



スポーツと文藝の握手

エス・テイ生

そのむかし詩人哲人等の上にも求めたやまないと、無自覚にも、以上は精神を磨くことの出る。環境に於いては、オリンピックの優勝者たる、その時代の英雄に頌歌を捧げ、その光輝を享受し得たのであるが、現代ではさうは、散文藝術——小説の領域に、上に述べたやうな自覚なしでは、スポーツの勇者のすがたのうちに、人格化された時代精神を醸成することが出来ない。そこでスポーツをかきこむだけの文藝が、容易には生れてこないのだと僕は思つてゐる。

我々は、常に足らざるところのものを慾望すると今述べたが例へばユーモア小説の類だ。よく新聞雑誌の編輯者の口から、今、最も要求されてゐるのはユーモア小説だといはれる。さうも思はしいユーモア小説が、わだちこに、激しい要求が如くに、激しい要求をユーモア小説に求むてゐる事實は争へない。同時に、スポーツに求めることの出る、明らかな精神

新妻久満男選

『ズリ捨て場』 秋野 夕雀
 ○ズリ捨て場をめぐり、自然発火するらし白煙も立ち
 ○白き砂赤き砂おほひかきまざるもの黒く焦げつゝ煙をばけり
 ○ぼろとすするズリのほりの上に立てば白き煙の甘すつばさよ
 ○ボツボツあつた、かき汗たまたませて手にとる頁岩のまろくもくする

秋日記事

珠雲 小野務平
 氣暖雲晴秋色妍
 立巻二百十旬天
 金風麗亞香千里
 到處歡聲兆有年

誰が殺したか

水谷準作
 龍造寺 龍造
 父 第三の殺人

河鹿鳴く頃

田村重雄
 河鹿鳴く頃
 私は川合の初夏を思ふ
 川合の初夏は河鹿と共に
 来た

潮聲視静抄帳

例會席上互選
 ○夏足袋
 神興昇々若衆の足袋や
 地を白く 晩霞
 夕立に足袋を脱ぎけり
 女連れ
 夏足袋の白きが走る
 夕暗に 花堂
 夏足袋の干せる垣根に
 暮れにけり
 夏足袋の汚れ目につく
 旅ころ 石城
 夏足袋を手に夕浴のゆ
 みけり

若果の色の
 戀とは知りや
 たた蝶の如く
 想ひかろき日のあたり



誰が殺したか (133) 水谷準作
 龍造寺 龍造
 父 第三の殺人

星男衛未亡人の惨劇事件が突如した日の午後、東京郊外渋谷の震災後とみに發展を遂げた道玄坂の賑はひから、少し離れた丘に立つ山の手アパートの玄關で、御免下さい。こちらに獅子内といふ人が居りますか

「御免下さい。こちらに獅子内といふ人が居りますか」

「はい、こちらに居ります。お尋ねの用は何ですか？」

「お尋ねの用は何ですか？」

「お尋ねの用は何ですか？」

河鹿鳴く頃 (1) 田村重雄
 河鹿鳴く頃
 私は川合の初夏を思ふ
 川合の初夏は河鹿と共に
 来た

潮聲視静抄帳 例會席上互選
 ○夏足袋
 神興昇々若衆の足袋や
 地を白く 晩霞
 夕立に足袋を脱ぎけり
 女連れ
 夏足袋の白きが走る
 夕暗に 花堂
 夏足袋の干せる垣根に
 暮れにけり
 夏足袋の汚れ目につく
 旅ころ 石城
 夏足袋を手に夕浴のゆ
 みけり

開院 五十嵐婦人科醫院
 醫學博士 五十嵐雄二
 平町新川町一
 電話三三〇番

腸胃病性 専門
 内科 胃腸病科
 花柳病科
 性病科
 皮膚科
 院醫科性腸胃村松
 (番七〇一電町南町平)

石炭 一〇〇%サーヴ井ス
 時節柄タンゼン 値下げ!
 一等塊 正味五十斤一俵 金貳拾八錢
 特塊 同 金貳拾五錢
 品質が優良 デナケレバ 値段がカリ安五錢
 目方が正確 局高イモノニナリトモ結
 此の點は當店を絶對に御信用願ひます。
 市内ハ一俵ヨリ迅速ニ配達致シマス。
 電話三七七番
 豆 炭 阿部石炭商店

良品廉賣に勝る商略なし
 磐城セメント特約代理店
 和洋銅物 釜屋商店
 磐城國平町五丁目
 電話九番 九九番
 振替貯金口座東京一〇九五六番

生花教授
 池ノ坊 生花を親切丁寧に御教授いたし
 ます。お遊びがてら御出下さい。
 平町四丁目泉屋旅館
 須藤まつ

日本石油株式會社特約店
 關影商店平支店
 本店 水戸線下館驛前
 電話六一番
 支店 茨城縣七油町田前
 電話五五五番
 支店 常磐線本郷前
 電話八二四番
 支店 常磐線四倉驛前
 電話四八四番
 支店 久慈 濱支店
 (電話一三七番)
 海上給油 大津、平海
 及油槽所 小名濱、江名濱

吉田眼科病院
 平町紺屋町 電話六八番
 醫學士 吉田久雄

海老天婦羅
 天多天
 天多天
 天多天

須藤まつ

大和田醫院

高久病院
 院長 高久忠
 平町町電五三

靈峰羊羹
 小川郷齋前
 平屋賣店

木村病院
 醫學博士 木村寅次郎
 婦人科 産科
 外科 內科
 藥劑師 立香彌一
 平町新川町十九番地
 入院隨意 病室完備
 電話一六四番

須藤まつ

